



時代を拓き 世界に貢献する人を目指して

# Global View

2019年8月23日 Newsletter 第60号 仙台白百合学園中学・高等学校 国際教育部

## 『行きたいから。確かめたいから。』

富永 是親(数学科)

「海外研修、または留学に参加する理由」を書類に書いたことがある人はいますか？私、富永は、JICA 東北の教師海外研修でインドネシアに行った時に書いたことがあります。遡ること7年前の2012年の冬のことです。自分にとっても懐かしく思ってしまう位に久しぶりなのですが、今回執筆の機会に恵まれましたので、当時のことを現在と照らし合わせて振り返りたいと思います。

元々のきっかけは平岡静香先生でした。平岡先生は前年度に JICA 東北の教師海外研修プログラムでインドネシアに派遣され、私はその話をとてもよく聴いていました。インドネシアに現地訪問した理由は、日本では2011年に震災が起きましたが、インドネシアでも2004年にスマトラ沖地震という大震災に遭ったことです。そこから、いかにして彼等は現実と向き合い、復興に向かったのか、2011年当時の日本の進むべき姿を見るべくして研修に参加したのだと伺っています。

富永の話に戻します。では、どうして私がインドネシアへ行くことにしたか？理由を尋ねられたとき、様々な考えが頭の中をぐるぐる廻りますが、整理して考えると単純に『実際に行って、見てみたい、感じてみたいから。』ということにたどり着きます。研修の話を聴いて、感じることも、考えることも多かったので、当時の私の中では『話を聞く。』にとどまる印象が拭えずにいました。どこか実感が湧かない感じでした。「ふ～ん、そうなのですね～」としか言えない状態。段々自分のなかで、沢山の話を聞きながら、その掴めない何かを模索していたような気がします。そんな現状を打開すべく行動を起こした事が研修参加へ繋がりました。

さて、インドネシアのバンダ・アチェという最西端の地に行った私は、現地の方々と触れ合ってみて、多くの刺激を受け、考えさせられました。8年経ってどのように感じているのか、あの時に何が起きたのか。復興への支援の在り方はどうあるべきなのか。そもそも復興とはなにか？諸外国の思惑と実際が交錯された現実を見た私は、言葉を失ったのを覚えています。今考えると、あのとき自分が見たものは、震災から8年経過した今の日本にも通じるものがあったのだと確信しています。「気仙沼の、沿岸部にそびえ立った堤防が広がり、海の見えない景色が本来の望ましい姿なのか？」と尋ねられると悩んでしまいます。

これからは、国際性がこれまで以上に求められる時代になります。実際に行かなければ得られないものは、数え切れない程あります。

インターネットで得られる字面の情報よりも、自分自身で感じたことの方が皆さんにとって、生きた情報であることは間違いありません。私が「こうであった」という話よりも、皆さんが思うこと、感じることを大切にして欲しいと思います。仙台白百合には、数多くのチャンスがあります。その機会を是非とも活かして欲しいと思います。



津波のモニュメント



現地の学校を訪問して